

＜報告＞入院中の悪性疾患患児の自主性に関わる要因 (第17回医療短大研究会)

著者	寺島 美紀子
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	9
号	2
ページ	267-268
発行年	2000-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/33748

[報告]

第14回医療短大研究会

平成11年4月20日(火) 18:00-19:00
医療短大大講義室

講師: 丸岡 伸 先生(東北大学医療技術短期大学部 診療放射線技術学科)

演題: 「分化型甲状腺癌に対する¹³¹I治療後の累積生存率」

分化型甲状腺癌に対する¹³¹I治療を行った213例において、Kaplan-Meier法による生存率と生存率に影響を与える因子について検討した。全症例での生存率は5年生存率で72.8%, 10年生存率で59.0%, 20年生存率で40.3%で、遠隔転移のある症例の生存率は5年生存率で60.9%, 10年生存率で43.4%, 20年生存率で28.8%であった。40歳未満、乳頭癌、肺転移の生存率が、40歳以上、濾胞癌、骨および骨肺転移の生存率に比し有意に良好であった。

第15回医療短大研究会

平成11年7月5日(月) 18:00-19:00
良陵会館大ホール

講師: 玉置 勲 先生(社団法人日本臓器移植ネットワーク)

演題: 「臓器移植法と臓器移植の現状」

本邦において臓器移植法がようやく成立し、平成9年10月16日より施行されている。今般、従来の心停止後移植とともに法制化された脳死下移植の初の適応例の出現を踏まえ、同法の趣旨と脳死下移植の現状について講演を戴いた。

脳死と植物人間の相違点、脳死判定基準、脳死下臓器移植(心・肝・肺・腎・脾・小腸)のメリット、移植コーディネーターの役割などが講述された。特に、海外の医療機関に全面的に依存していた心臓の移植が国内で対応可能となり、法施行以来初適応となった症例についてその詳細が紹介さ

れた。(文責: 尾形)

第16回医療短大研究会

平成11年9月9日(木) 18:00-19:00
医療短大大講義室

講師: 佐藤 真理 先生(NGO[シェア: 国際保健協会市民の会])

演題: 「カンボジアの保健医療情勢」

タイ・カンボジアを中心にアジア・アフリカで保健・医療分野の海外協力活動を行っているNGOに所属する佐藤真理さんが、カンボジアから一時帰国した折、母校に立ち寄り活動報告をしてくれた。

活動の目的は1. 地域住民の健康問題の解決と住民主体の活動推進、2. AIDSを含む予防教育で、① 母親グループを育成し、地域活動の活発化、② 保健教育(母親Gと学校)、③ 伝統助産婦のトレーニング、④ 保健局・保健所スタッフへの支援である。

カンボジアの保健医療状況は悪く、乳幼児死亡率は106/1000出生(日本4)、妊産婦死亡率は473/10万出生(日本8)である。伝統助産婦の3日半のトレーニングは鍋釜持参の宿泊研修で、文盲ゆえ教育には視覚教材や記号・演技などで工夫しているという。またHIV/AIDSは爆発的に増加し、感染予防の指導がポイントという。

世界中のNGOの仲間と大学でクメール語を学び、自分の専門分野で地域に入って活動している彼女の目は、とても輝いて見えました。(文責: 佐藤(喜))

第17回医療短大研究会

平成11年11月24日(水) 18:00-19:00
医療短大大講義室

講師: 寺島 美紀子 先生(東北大学医療技術短期大学部 看護学科)

演題1: 入院中の悪性疾患患児の自主性に関わる

要因

入院中の悪性疾患患児の療養行動及び遊びと学習における自主性の関連要因を、WHO の提唱しているライフスキル* を基に明らかにする目的で、幼児から中学生 10 名の行動観察と面接を行った。その結果自主性が見られた行動は、歯磨き、清拭(入浴)、学習、遊びで、自主性が見られなかった行動は、内服、うがい、吸入、帽子やマスクの着用であった。また自主性に関わる要因として 1. ライフスキルを身につけているか、2. その行動に対して肯定的な思いを持っているか、3. 治療と病状を理解しているか、4. 学習と遊びが保障されているか、5. 体調が良いか、6. 家族や看護職者のサポートがあるか、が挙げられた。

* ライフスキル：日常的に起こる様々な問題や要求に対して、より建設的かつ効果的に対処するのに必要な能力で意思決定、ストレス対処、目標設定、自尊感情、コミュニケーションスキルを持っている青少年や大人は健康上好ましい行動をとると言われている。今日の欧米の健康教育において最も重視されている概念の一つである。(WHO 精神保健局ライフスキルプロジェクト)

講師：山崎 登志子 先生（東北大学医療技術短期大学部 看護学科）

演題 2：精神障害者小規模作業所への通所目的と自立援助に向けての一考察

精神障害者の社会参加と地域の中での自立した生活の推進が重要視されてきている中で、精神障害者自身の社会復帰施設への通所目的を理解することは、精神障害者の自立支援を考えるうえで重

要な意味を持つ。そこで、自立支援の方向性を探ることを目的として、社会復帰施設に通う精神障害者自身の通所目的を理解し、さらに通所目的とその関連要因に性差があるかどうかについて検討を行った。

〔方法〕 精神障害者小規模作業所（以下、作業所）に通所する精神障害者（以下、通所者）50 名に対し、質問紙を配布し、その場で回収した。

〔結果〕 因子分析により、作業所の通所目的として 5 項目が抽出され、それぞれについて「集団生活と楽しさを求める」、「精神の安定を求める」、「生活習慣を求める」、「作業への取り組みを求める」、「消極的に参加する」と命名した。

さらに、通所目的、通所目的と就労意欲との関連において以下のような男女差が見られた。(1) 女性は男性に比べ「集団生活と楽しさを求める」目的で通所する傾向にあり、「作業への取り組みを求める」目的で通所していた。また、男性は女性に比べ「精神の安定を求める」目的で通所していた。(2) 就労意欲が高いと、男性では「消極的に参加する」目的が強く、「精神の安定を求める」目的は強い傾向が見られた。一方、女性では就労意欲が高いと「精神の安定を求める」目的は低い傾向がみられた。

〔まとめ〕 通所目的は 5 つの因子に要約されること、男性は就労を、女性は作業所内での活動を主な目的として通所している者が多いと考えられた。自立支援として男性には個人の能力に応じ、より就労に近い活動計画を立てる等、就労を意識した援助を、女性には生活技能訓練の向上に向けた援助を行うとともに、作業所以外の社会にも視野が広がるような関わりが必要であると思われた。